



百人首改親抄

一



武庫川女子大学図書館	
昭和 年 月 日	9/16/47
	Ke
115179	1



註百人一首序

予^カ游^{トモ}長^カ生^シ當^ニ注^ス百人^ニ

首[○]層^{ツクリ}葉^{カウラ}未^タ脱^{ダツセ}信[○]馬^カ龍^{エシ}木^{ツク}

百人一首[○]氣^ハ象^カ

王^マ人^{エー}以^ル咏^ニ如[○]海^ニ而^カ蘇^ス黃^ス門^ニ

筆^{カン}之^{テイ}石^ス馬[○]色[○]赤[○]名[○]字[○]家[○]名[○]
自^ラ誌^コ訓^ク世^シ多^ク後^シ流^{リウ}而[○]一^一而^一之^一
廢^{ナシ}耕^{サム}家^{コト}習^ヒ戶^{コト}傳[○]而[○]走^{ソク}卒^{ソク}之^ジ
董^{ドウ}名^モ破^ク背^{ハイ}誦^{セウ}焉[○]予^レ未^{ヨリ}抱^キ好^ケ未^ヘ
之^{ヘキ}解[○]与^ラ生[○]同[○]病[○]而[○]憐[○]每[○]以[○]

生^一之^一志^一業^一不[○]平[○]慨[○]然[○]矣[○]
不^ニ自^ラ揆^{ハカ}為^シ之^一第^一釋[○]却[○]以[○]政[○]親[○]
陸^ハ云^フ有[○]堂[○]之^一業[○]始[○]代[○]其[○]子[○]
又[○]上[○]屋[○]之^一架[○]屋[○]以[○]距[○]太[○]方[○]之^一
謂[○]也[○]已[○]失[○]和[○]詩[○]少[○]家[○]國[○]語[○]

石國信之自之雅俗之解
今有古今之貴賤之輕修之
解之析而古今之貴賤之輕修也
且水濟成語莫如古而雅者
有自之深務法古行由之達

古之解之為欲志古之乃
美之集之以徵之乎風者
又于此乃雅之甘源於美之
府甘源於美之甘源於美之
今之貴賤之輕修之

百人一首改親抄序

水月此のいわけさきさつしらにけりも
くんせうなれ二人三人すえんうきも
色じうもふくしうのひもふも難波
らうれき雲沖のうらうはあてられぬ
うらうつあはれ百人一首改親抄と
たかまふふむしうをうきけりうら
うけううううううううううう
けうのいふれきすうううううう

を誰とあはせ松かぬふしあるらん
えんれまうそのうへ海めくや
いてちとれ人うこのと海とあはれ
とりいれもあはれうへ先師藤原いゆを
今あへめくはうへ海後のわくへ
あんやうへうへ志乃あはれ
けふと十五夜の月乃と新くへ
いされぬいされぬうへうへ
うへて彼もあはれうへうへうへ

はせうへうへうへうへうへ
いされぬいされぬうへうへ
海人あはれうへうへうへ
うへうへうへうへうへ
ま抄うへうへうへうへ
うへうへうへうへうへ
うへうへうへうへうへ
うへうへうへうへうへ
うへうへうへうへうへ
うへうへうへうへうへ

松のまじふとたきく

末流子集くはく人さる

延享にけり丁卯の菊月

花月堂主人樋口宗武識之

凡例

一 け書いしより有るふ抄物に記ふものには
略してつゝつゝにふ贅

一 此書は福乃の記述師の注記にありて世
に傳ふる書寫のなかり乗誤をくれり一二
といふ百人一首一人これふ列を以て能因
法郎の歎に之を山乃地理とてつゝ三條院師製
秋の月を幸とてつゝふれ記今とてを削る

一 書寫流布の中ニある流弊はつ仲石と伏焦石なり
と記し大僧正慈圓天台座主よりなきてと事

況あまろくみふ先師朱墨あまろくを混漫
して書留をた今あまろくを削ぐ
一万葉集以下これあまろく先師み字七葉ふく畧一
のあまろくと今本書を考て悉く
一平人の傳記は又古抄は穢て略といへども古
抄は僅余の張記あまろく改てこれに記す

百人一首改親抄卷一

古本法抄の記ふ三葉老は小倉山莊は法船して
百人の予と一さつゝあまろく取はまろく法船して
まろく百人一首と小倉山莊色紙味予とい
海り入るまろくあまろく入るまろく法船し
まろくあまろく百人のまろくあまろくまろく
子息あまろくまろくあまろく名法はあまろく
あまろくまろくまろくまろくあまろくまろく
まろく埋まろくあまろくまろくまろく
集は三葉集

續機

非波りたをてしうてとひそをてしうてとてしうて
新後拾遺集の建保二年月裏秋十五首予令秋集と
雅道

思ひ入るももてしうてとてしうてとてしうてとてしうて
秋乃予の元良親王の予とてしうてとてしうてとてしうて
南もたもてしうてとてしうてとてしうてとてしうて
うとてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうて
人乃予とてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうて
僻有るもてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうて
載集の也とてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうて

ゆとてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうて
而乃二首撰ひてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうて
よとてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうて
かふけい百とてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうて
これぬ予とてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうて
のあふとてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうて
予れ能とてしうてとてしうてとてしうてとてしうてとてしうて

追考明月記云文暦二年五月二十七日予本自
不知文字事嵯峨中院障子色帟形故予可書之
旨彼入道懇切雖極見苦愁添筆送之古来人歌

各一首上自天智天皇以来及家隆雅經卿云云
されは主あれも山莊はあつていろ色留れと云
りつるもきく月記の文よりにけりといふ
と又風雅集の新四歌集の重保の雲の清きに
四の字よりとれ歌と云く名よりとる字と云
留れはくといふといふ色に入るといふといふ
ゆるふ信といふといふこれなりてかたといふた
りくれば色留の歌なりといふといふ後深大寺
元大匠

わすれ浦のけりねはれはけりかみけりといふ

こそとてちみそ人乃安てきて色留ふといふ
字といふとほめよといふてとてけりといふのけりといふ
といふて優あつてといふて誰といふといふ
いふといふや主あつてといふといふて誰といふといふ
後古く集風雅集といふといふて誰といふといふ
山莊のおもひといふといふて誰といふといふ
年毎日一首中を云

我よりなるとれは火食といふて誰といふの古に
とてとてりといふといふ山莊の信成といふといふ
らといふといふ又新古く集信成

[illegible]

古州云乎田原天皇是誤也光仁天皇オホニ編年志
貴親王ミカド号田原天皇志貴親王天智天皇第廿五皇
子也凡此百首作者の系當ふ法州ホウシュと云ふ一今皆
畧と云ふ

秋の興りゆのそ乃名をゆゑもあまのふかきつ
後撰系秋中よりゆゑと歌と六帖よりなり
ゆのそふかきりかりやハ百葉集借廬しかり
ゆとふかきこと暗きありあひかきとひりそ
とふかきハ刈穂とふかきハ百葉となり暗
推かりゆかりハ例のそ句也和名集曰毛詩

○持統天皇

去るてまふくくく白あれぬゆとて河のわくやま
新古と集まぬゆとていさなりしハカ集
一ノ孫原宮御宇天皇代天皇御製とて芳二句
ナフハキヌラニ
夏来良之方四ノ夜乾有とゆり
コロモオヒタリ
ナフハキヌラニ
ハ月一と芳十云

寒過暖来良之朝日指澤鹿能山爾霞輕引

けあやがとててふふまらさめくくくとあまへ
一彼集まけりとくく来のもどゆりくくハ
くくくあれいきよしふのまを漬けうといいて

新ゆつま漬漬けへとあれあつてくくハ来乃ま
やひひあまかり但もハ理おとてハ遠くは
一衣乾有とまきくくハくくくくとあまへとま
やも又あまかきくと春とてまあふくくくハ
日集芳十九のまきくくと春過而来向者との
ハル
スギテナラキ
合方ハ
白あしハ白とハかきれハゆりくく白あれぬと
と袖ももあかりかくハハ和四十市部とてま
トラチ
カスツキ
市郡播原宮よりくくくくくをうとてハ月付て
はむあくくくく箱れくくふふふふくくく一夏
夜とてりあてゆきくく敷多ノ白あふくくく付て

しるまゝつてまゝうまわ〜〜と何れと感
てわ〜いもうりり 管家有菱袴小用箱衣帶隔年
香しりり 神中妙小風俗をとりて云

かひに白き言いかさうのひききりてぼろ
乞ふ〜なりと沈みりり 又万葉集才十四

筑波禰爾由伎可母布良留伊奈乎可母加奈
思吉兒呂我爾努保佐流可母

下白か〜〜〜のほろ〜もかりか〜と
い〜〜〜〜りり けす布とち〜〜〜が言
ろ〜〜と身してあるわ〜〜〜もは〜とふ

布の〜沈みりり 衣〜〜〜〜て沈み〜古衣
あ〜〜〜〜〜ふ〜と白あ〜の衣〜と
〜〜りり 白〜〜〜ふ〜と白あ〜の衣〜と
〜〜〜と白あ〜の衣〜と〜〜〜春〜と
あ〜の衣〜と〜〜〜も白あ〜の衣〜と
〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と
〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と
〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と
〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜と

[illegible]

一してふくはなり 古き頃よめ言お色れ豊茂か
 ゆづるもなり ぬへ者くひふくはくもはな
 里是又登以切知して知し氏と二四相通也古今集れ
 門をりてへといふも門をりしといふりけ敷多し
 推して架一万葉集よ云のまともてふとをりこころ
 といひといひの言はぬしづ中華のまともをり
 かりも五言相通音の自然ありれ架一機は音かくた
 ありしつら中流ものつとよもをりふくはくはく
 の是くもふありてうやぬく榮とてげくめ
 してあそしちやふふけくそ敷あふふくすやゆん

そて他志未詳かゝりて我より笠金村田邊福壽
おまゝしむる一節あり但又人々のみれしれ
るゆゑも何と云ふ門せられずと人々の海を去
るゝ天武の初めは(なりて石見され属あち
にぬてより任しそつちのやゝさうや天武法
時柳本援あまのの日本紀は柳本氏の人々
これいひ親談れり

何れ乃いふ尾のちり尾のちり一巻なりしは
拾遺集巻三のいふなりしは二巻なりしは
集賢十一

念友念毛金津足櫓之山鳥尾之永此夜乎

いずのたふ或は秋日として今れ分てはよむなり然
もいづの天流の分ありさされずへ新千載
集巻二は人々そつちのいふいふ有るなり
此志未詳なりかりかり拾遺集の巻に
させのめはたのそひるなりなりなり
分る部とて入るなりふふふふふふふふふふ
そとそとそとそとそとそとそとそとそと
そとそとそとそとそとそとそとそとそと
そとそとそとそとそとそとそとそとそと

○山邊赤人

赤人の父祖東洋時代ハ万葉才六ノ神皇元年より天
平八年までの千八百餘年ハ西武ノ朝の人ナリ山
邊氏ハ日本紀顯宗紀ノ伊予ノ来日部小楯ト云人
ノ祖テ山部連ト賜ヒクハ山乃ツトト賜リクハ
あり天武天皇十三年十二月ハ大伴の連オハ五十氏
小宿祢姓トナシヒクハ内山部トナレ内ト夫より
山部宿祢あり續日本紀ハ延暦四年五月詔曰
先帝御名及朕之諱自今以後宜並改避於是改
姓白髮部為眞髮部山部為山シラハベノヌキミトハ光仁天皇ト

初ハ白髮王トシハ桓武天皇ト山部王ヤハベノオホキミトナレクハ
ありハ詔トナシハ赤人トナレクハ
いそ昔よりナレ赤人トナレクハ
おほつちあり昔々赤人トナレクハ
トナレクハ今ハ浮城天皇ハ赤人トナレクハ
伴トナレクハ土左日記トナレクハ
トナレクハ山部ありハ桓武ノ赤人トナレクハ
山部トナレクハハ別ノ氏トナレクハ
トナレクハ山部宿祢トナレクハ
初ハ山部赤人トナレクハ

山色山人とて人といひぬふ極楽天皇の端ふ
うすりて日本後紀第一延暦十二年紀にも山色
山人春日といふ内舎人あり

追考山部くまてらるゝとて帝れ山部を
避ちるゝ例のふとあり大伴くまてら後
人といふといふといふといふ一國人といふて
くにたといふといふといふといふといふといふ
田舎浦ふといふといふといふといふといふといふ
新古今集を初といふといふといふといふといふ
中ふ山部宿祢赤人望不尽山作歌一首并短

歌ひ短き別々のうたて候ふやういふと
もそののうたをうたうといふといふといふ
源氏集がて入るよりほのうた新古今集の
もてていふといふより源氏集も勅撰といふ
てそのうたをうたて用ひあれるといふ
万葉集

ヒルミシト アカヌタゴノウラオホキミノミコトカレコヨルミツルカモ
晝見騰不飽田兒浦大王之命恐夜見鶴鴨

あしといふていふ浦のうたといふていふ
ふといふといふといふといふといふといふ
ちといふといふといふといふといふといふ

おもて味くふりけりやとよめふいぢ
絶唱くふへー田兒の海へ駿河国盧原郡ふり富
士はかゝる富士郡也山名富士郡のふとを
都良香の記より

追考富士山と俗に孝靈乃時涌出と云れ

万葉集三赤人のすふ

天地之分時後神充備手高貴寸駿河有布
士能高嶺乎

とあり、神代よりと来き山也又都良香
富士山記云富士山東脚下有小山小山延喜

二十一年三月雲霧晦冥十日云神造也こ
もくとつふりやと云ふ

○猿丸大夫

古今集自序云大友黑主歌古猿丸大夫之次
也頗有逸真體甚鄙也ふりも猿丸大夫の
造真のりてす乃作やーりーやられ
け席のゆふりーふりー又猿
丸のふりー河も竹氏の人ーとゆくと大
夫といふ相當の友妻のりくあはほとく
云流りもし伝ーりー不集くふりー

あまのこはつの子六人のすめもくもく
何人なりやとてあ
今れは布の巾乃てくは
ま歴ありてありてくは
用いしもの敷くことく人丸集積を集思地一人は
のすすくは敷くありて人丸集思地一人は
同様に洗くことく人丸集思地一人は
やとてありてくは敷くことく人丸集思地一人は
わくこはね敷くことく人丸集思地一人は

古とは集思地といふ人丸集思地の家のすめもくもく
とてくは管家万葉集上よけすを敷くことく人丸集思地一人は
時のすめもくもく
すむ不意なる也奥くは敷くことく人丸集思地一人は

オクヤミニスミテフシカノヨヒ サラスツミトフハザノチラミクツシモ
奥山尔住云男鹿之初夜不去妻問芽子之散久惜裳

紅葉のすめもくもく
麻のすめもくもく
つては清く

秋山寂々葉零々麋鹿鳴音數處聆勝地尋求
遊真處無朋無酒意猶冷

いふくは勝地尋求くは敷くことく人丸集思地一人は
くは敷くことく人丸集思地一人は
くは敷くことく人丸集思地一人は
くは敷くことく人丸集思地一人は
秋のすめもくもく

